

## 'A History of SAMEKAWA

ray and shark skin as a material for the decorative arts'

森中 香奈子

鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻博士後期課程

MORINAKA, Kanako

Tsurumi University, Graduate school of literature, Department of Cultural Properties

日本工芸史において「鮫皮」とは工芸素材となるサメ或いはエイの背皮を指す。特に日本刀の柄に用いられるエイ、*Pastinachus sephan* (Forsskal) の背皮は「本鮫」とも呼ばれ、皮歯が堅牢で一定方向を向いているため滑り止め効果があるという実用性と、その配列の美を兼ね備えており、古い歴史を持つ。

その皮が世界的に珍重された *Pastinachus sephan* はインドから東南アジアに生息するため、アジア、ヨーロッパにおける鮫皮工芸の歴史と伝播は各国の貿易史と深い関わりを持つ。日本における伝世品最古の例は「金銀鈿荘唐大刀」(国宝 8 世紀) であり、東欧で製作されたとみられる「シャルルマーニュの剣」(9・10 世紀) の柄には鮫皮が残存する。聖武天皇の佩刀と伝えられる金銀鈿荘唐大刀の起源は唐、さらにササン朝ペルシャに遡る可能性がある。その後日本における鮫皮工芸の遺品は権力中枢の移行と共に宮廷貴族から武士階級の所持品へと推移した。十七世紀には日本製の鮫皮工芸品がオランダ東インド会社を経てヨーロッパへ輸入され、後に中国、韓国産のものもイギリス東インド会社を経て輸入されると、以前は刃物類の装飾のみに用いられていた「鮫皮」はヨーロッパで家具調度装飾にも用いられるようになり、フランスで「Garuchat (ガルージャ)」、イギリスで「Shagreen (シャグリーン)」と呼ばれる独自の工芸を生んだ。

日本の「鮫皮」に関する文献のなかで、日本刀装飾に用いられる「鮫皮」についてもっとも詳しいのは『鮫皮精義』(1785 年 稲葉通龍) である。上巻は日本刀の柄に使用されるエイ皮の産地や偽物の見分け方などが記され、下巻は鞘に使用される鮫皮について記されており、北海産のチョウザメの鱗や静岡産のアイザメの皮が用いられるなど、十八世紀日本で使用された「鮫皮」の種類、産地は多様であったことが読み取れる。同様に十七世紀のオランダ東インド会社関係資料にも当時流通した鮫皮の名称が遺されているが、今日では日本刀の伝統継承と共に、「鮫皮」についてもまた、過去の原料や産地、それが使用された作品を同定することが困難になっている。